ラフカディオ・ハーンと D.H.ロレンスにみる森と樹木

伊野家　伸一

I

怪談で知られるハーン（Lafacadio Hearn）は、そのなかに「樹霊」への意識といったものを包摂させているように思える。*Kwaidan* の“Ubazakura”は，お露という娘の乳母であるお袖が，病のため助かるまいと宣告されたお露の命を救うため，不動様に願掛けを行い，自らその身代わりとなって死んでゆくという話である。その臨終に際してお袖は，不動様へのお礼と記念として桜の木を植えるという約束をお露の家族に託す。その約束は果たされ，植えられた桜の木は以下のようであったと語られる。

> The tree grew and flourished; and on the sixteenth day of the second month of the following year, —the anniversary of O-Sodé's death, —it blossomed in a wonderful way. So it continued to blossom for two hundred and fifty-four years, —always upon the sixteenth day of the second month; —and its flowers, pink and white, were like the nipples of a woman's breasts, bedewed with milk. (41)

ここには，実の母親の愛情でもってお露を愛した乳母のお袖が，植えられた桜にその霊魂を宿らせたかのような姿で，２５４年の間花を咲かせ続けた様子が見て取れる。よってここは，ハーンにおける「樹木に秘められた霊魂」という意識を見出すことができる箇所といえよう。

また，ハーンが西洋物質文明に反発・疑念を有していたことは，*Glimpses of Unfamiliar Japan* での「西洋文明は真実，人倫向上の道に向かっているのだろうか」（Preface x iii）との記述や *Out of the East* の“The Dream of a Summer Day”における「１９世紀の西洋物質文明よりも当時の日本の雰囲気が好ましい」（1）と述べている彼自身の作品等に加え，厨川白村氏（１３０）・丸山学氏（２１３）の指摘にもみられる。そしてハーンはそうした文明嫌悪の反動でもあるかのごとく，その対極的な世界を志向したのではないかと思われるところがあるが，そのひとつに森・樹木への愛着や畏敬といった面を見いだすことができるのではなかろうか。

そしてやはり産業化，物質文明への反発・嫌悪とともに森・樹木への傾倒を示した作家として，D.H.ロレンス（David Herbert Lawrence）を挙げることができよう。鉄村春生著『異端の森—樹木から拓く英文学—』でも，森と樹木という観点からロレンスの作品への考察が加えられている（２１６－２５７）。

ハーンとロレンスについては，元国際ペンクラブ会長のフランシス・キング（Francis

King) 氏により「ひんぱんに環境をかえることによって想像力を活性化させた点において，ハーンとロレンスは似ている」との指摘がなされていることが，『へるん　別冊　来日百年記念報告集』（１３）にみられる。このような両者の類似は示唆されてきてはいるが，それぞれの作品の検討をふまえての考察はあまりなされていないようである。そこで本稿においては，森・樹木という観点から，ハーンの諸作品とロレンスの *Lady Chatterley's Lover* ついて比較・検討を試みることにする。ロレンスの当作品は「この作品が，産業主義批判を一つの大きなテーマとしていることは多くの研究者が指摘している・・・・・・」（糸多１９４－１９５）との評価を受けるものであるが，森・樹木が重要な要素をなしていることも明らかであろうと思われるからである。

Ⅱ

まずロレンスの *Lady Chatterley's Lover* をみていくことにする。井上義夫著『地霊の旅　評伝 D.H.ロレンスⅢ』の「チャタレイ夫人の恋人」では，「この小説の主題は，物怖じすることのない小さな雛の生命が，コニーとメラーズを結びつけ，彼らが森只中で交わるという事実によってほぼ語り尽くされている。大地と森の生命に育まれて雛が成育するように，森の神秘に扶けられて二人は交わり，新生の一歩を踏み出す」（３６５）との指摘がなされている。

このような指摘をふまえ，戦争で不具となった夫をもつ貴族の夫人がその領地の森番と関係を結ぶという筋の当作品に眼を向けるならば，第一次世界大戦の負傷によって下半身不随となり車椅子での生活を余儀なくされ，小説の執筆とともに炭鉱経営に意欲を示すようになったクリフォードは産業主義･産業資本家を象徴する人物とみることができようが，その彼の姿は

> But now that Clifford was drifting off to this other weirdness of industrial activity, becoming almost suddenly changed into a creature with a hard efficient shell of an exterior and a pulpy interior, one of the amazing crabs and lobsters of the modern industrial and financial world, invertebrates of the crustacean order, with shells of steel, like machines, and inner bodies of soft pulp.... (110)

という様相を呈する。そして抜け目ない実務的な能力は有しており，利益と効率性の追求はできるが，単独で人生の感情面に対処することが出来ない人間として描かれている（１１１）。

一方クリフォードの妻コニーは，そのような夫の作り出す世界や雰囲気のなかで「自分

が周囲から切り離され，実体・生命のある世界との繋がりを失い，滅びつつある自らを漠然と感じる」（２０）ようになってゆく。そうしたなかで，第３章ではチャタレイ家所有の森へ避難場所を求めるコニーが記されている。

> She would rush off across the park and abandon Clifford, and lie prone in the bracken. To get away from the house—she must get away from the house and everybody. The wood was her one refuge, her sanctuary. (20)

だがこの時点では，コニーはまだ真実森と繋がりを持っていたのではなく，“the spirit of the wood itself”（２０）というものを感じてはいなかった。このあたりについては鉄村春生氏も「場面を重ね，章を追うごとに，森との繋がりがコニイのなかにゆっくりと深まっていく。彼女の甦りはたしかに漸進的である。そのために，たとえば季節の巡りによって森の緑が徐々に濃くなっていく様が物理的に分るから，彼女の感受性が回復しつつあるというのか，それとも季節が巡るにつれて，森自体が彼女の甦りに徐々に微妙な影響をあたえ，彼女の空虚を埋めていっているのか，そのあたりのことが定かに決めがたい描写になっている」（２４７－２５８）としている。

次に第５章においては，「森」に込められたイメージが，この先のストーリーの暗示とともに展開されてゆく。２月のある朝，コニーとクリフォードは森へ出かけてゆく。ここではクリフォードも「この森，古いオークの樹木を愛し，幾世代にもわたって自分のものであったと感じ，それらを保護し，この場所が荒らされないように外界から隔離しておきたい」（４２）と思い，「これが本当のイングランドだと思う」（４２）との言葉をコニーに発する。そして「この森を触れられることのないままに，誰の手も加えられないままにしておきたい」（４２）というクリフォードの言葉の後，

> There was a certain pathos. The wood still had some of the mystery of wild old England. But Sir Geoffrey's cuttings during the war had given it a blow. How still the trees were, with their crinkly innumerable twigs against the sky, and their grey, hoary, obstinate trunks rising from the brown bracken. How safely the birds flitted among them! And once there had been deer, and archers: and monks padding along on asses. The place remembered, still remembered. (43)

と森に古代からの雰囲気が保たれ，自然の生命の息吹きが感じられる様子が示されている。しかし，クリフォードはこうした森に感じられるようなイングランドの伝統を守ってゆくためにも子供が必要だとし，自分たちの血をひく真実の子ではなくとも後継者としての子

供を，夫である自分以外の男性との関係によって産むようコニーに説く（４３－４５）。そして後にコニーと深い関係をもつことになる，当作品の重要人物である森番メラーズの登場となる（４６－４８）。井上義夫氏は『ロレンス　存在の闇』において，当作品がロレンスによって３度改稿されていることを指摘し，それら３作を比較しながら考察を加えているが，それによると「・・・・・・作者は，第二草稿の『森』の神秘を，最終稿では『メラーズ』という人間の中に移し入れた・・・・・・」（１７６）のであって，「・・・・・・猟番が・・・・・・隠者，或いは聖人のごとき高貴さと，神秘的雰囲気と，超人的な野性味を身にまとう様が如実に見てとれる」（１７６）とされている。そしてそうした理由をロレンスの「・・・・・・人と大地と動物の生命が同一の肉体に宿るとするアニミズム的な宗教性に裏打ちされた信念・・・・・・」（１７７）であったとしている。ここ第５章では，まだ漠然とではあるが，上記のような「森」の様子が記された後メラーズの登場となること等から，同書の指摘にみられるように「・・・・・・メラーズの体現するものは森の属性・・・・・・」（１７６）とのロレンスの意図が感じられよう。またロレンスのアニミズムについては，「土地のもつ魂，霊」という彼の意識を表している *Studies in Classic American Literature* における“The Spirit of Place”もその一例といえようか。

このように第５章では「森」の神秘的で，産業化に蝕まれてゆく社会が失いつつある自然の生命や，古代からの雰囲気が残存している様，メラーズという人物と「森」との重畳性の暗示，一方クリフォードに象徴される現代という時代の特質は嫌悪されるべきものであるとの見方が，次第に浮かび上がってくるように提示されているといえよう。

続いて第６章では「恋愛，喜び，家庭，母，父，夫，こうした力強い言葉が半ば死んだ状況にあり，日々死滅に近づきつつあり，・・・・・・セックスさえも瞬間的に人を興奮させるものにすぎない・・・・・・」（６２）時代，これが現代である旨が示され，その後に，しばしば「森」を訪れるようになったコニーが森番にことづてを伝えるために，「森」へはいっていくシーンでの「森」の描写が次のようになされている。

> Constance walked dimly on. From the old wood came an ancient melancholy, somehow soothing to her, better than the harsh insentience of the outer world. She liked the *inwardness* of the remnant of forest, the unspeaking reticence of the old trees. They seemed a very power of silence, and yet, a vital presence. They too were waiting: obstinately, stoically waiting, and given a potency of silence. Perhaps they were only waiting for the end: to be cut down, cleared away —the end of the forest; for them, the end of all things. But perhaps their strong and aristocratic silence, the silence of strong trees, meant something else. (65, author's italics)

このように森の姿・雰囲気に共鳴するコニーは，水浴中の森番メラーズを目にし，そこに「純粋な生命あるものの美」（６６）を認めてゆく。

従ってここにも，現代という時代の悲惨さや空虚さと，それらと対峙する存在としての「森」，そしてその「森」と重ね合わされるイメージを持つメラーズ，さらに「森」とメラーズに惹かれ，共鳴し，そうした世界に意識を向け始めるコニーをみることができよう。「コニーの存在の本質を説明する表現の多くが，この森の描写と重なり合っている・・・・・・」（田部井　２８４）との指摘は首肯されるべきものと考える。

また第８章では，ボルトン夫人の勧めで森番の家の裏手に咲く水仙をみるために「森」に入ったコニーは，今という時代の世界や恐ろしい肉の腐ったような人間を忘れたいと思いながら歩いてゆき，水仙にひ弱な姿ながら真の強さをみてとり（８６），そこに産業化の広がりの下で圧迫されてゆく人間とは対照的な生命力を見出してゆく。そうしたなかで，コニーも「森」の醸し出す「生命」を感じ，それに自らを共鳴させてゆく様がみてとれる。

> Constance sat down with her back to a young pine-tree, that swayed against her with curious life, elastic and powerful rising up. The erect alive thing, with its top in the sun! And she watched the daffodils go sunny in a burst of sun, that was warm on her hands and lap. Even she caught the faint tarry scent of the flowers. And then, being so still and alone, she seemed to get into the current of her proper destiny. She had been fastened by a rope, and jagging and snarring like a boat at its moorings. Now she was loose and adrift. (86)

マツの木からコニーへと生命力が流れ込んでいるともとれるここの描写について，鉄村春生氏は「・・・・・・ロレンスは・・・・・・人と木を呼び合わせ応え合わせることによって，コニイが人間というより，春の訪れとともに豊穣の予告を受けた若木または若木の一部に変身していることを語ろうとしているかのように思える」（２４９）とし，さらに「木とおなじような属性を得たり，似たような現象をくぐり抜けることで，コニイはロレンスの樹木変身願望の一端を体現しているように思える」（２５０）と解している。

そしてこの後，コニーは「雉の雛を育てるための静かな場所」（８７）でメラーズと会うことになるのである。よって第８章では，「森」の存在，またその意味が一段と大きくなり，空虚な現代・産業化社会と対峙する「生命」の満ちた場所として浮かび上がってくるとともに，鉄村春生氏の指摘する点もまたうかがえるように思われる。

また第１０章であるが，ここはコニーとメラーズが関係を結ぶに至るという点で当作品のなかでも重要な個所といえよう。ここでは，本稿でも引用した「産業活動に熱中し，ある種の甲殻類のようになってしまったクリフォード」（１１０），また「自分たちの血をひかない，真実の子ではない後継者としての子供を望む彼」（１１１－１１２）は，その「半

真実や虚無」（１１２）によってコニーを彼からいっそう遠ざけることになり，彼女は「森」へ逃避するようになる。コニーはメラーズから雉小屋の鍵を渡され，頻繁にそこへ出かけるようになり，雌鶏が抱卵している姿に女性の本質を感じ，雛鳥の誕生は彼女に喜びと感動をもたらすが，子供を望めない今の自分に「女性としての寂しさと苦悩」（１１４）もまた覚える。メラーズはそうしたコニーに対して同情と憐憫にかられ，彼女を小屋の中に誘い，最初の関係を結ぶことになる。ここには，産業化・物質文明の空虚さに苛まれていた人間が，鳥の抱卵・孵化という「生命の誕生」を契機として，産業化社会とは対極にある「森」という場で，結びついてゆく姿がみられる。

この翌日また「森」へ出かけたコニーは，「森」の樹木がもつ上昇的な生命力を自らの体内に感ずるのである。

> She went to the wood next day. It was grey, still afternoon, with the dark-green dog's-mercury spreading under the hazel copse, and all the trees making a silent effort to open their buds. Today she could almost feel it in her own body, the huge heave of the sap in the massive trees, upwards, up, up to the bud-tips, there to push into little flamey oak-leaves, bronze as blood. It was like a tide running turgid upward, and spreading on the sky. (121-122)

この際には彼女はメラーズと会うことができなかったが，その午後，再度彼のもとを訪ね，自分の鍵で小屋を開け，「樹木が醸し出す静けさと生命が強く感じられる場所」（１２３）という様子の中で，２度目の交わりをもつ。しかしこの時には，コニーは「自分の奥深い所で，新しい戦慄が，新しいむき出しのものがうごめきだすのを感じ・・・・・・半ば怖しさもあって・・・・・・自分から分離を望んだ」（１２５－１２６）というふうに，メラーズと真に一体化することに躊躇してしまう。ここではメラーズとの間に距離を感じてしまうコニーではあったが，知人との交流の中で赤子に触れ，その「赤子の女性的な無邪気さ，柔らかなういういしい暖かさ，ういういしい生命，守る力がなくとも怖れを知らない姿」（１３１）に喜びを覚えた直後，メラーズに会い，３度目の交渉をもつことになる。この時，彼は性急にコニーを求め，林の中の小さな空地，即ち屋外，自然の中で交わってゆく（１３３）。そしてコニーは，ここでの行為の中で，自分の内部に「生命」を強く感じるのである。

> And then began again the unspeakable motion that was not really motion, but pure deepening whirlpools of sensation, swirling deeper and deeper through all her tissue and consciousness, till she was one perfect concentric fluid of feeling. And she lay there crying in unconscious, inarticulate cries, the voice out of the

uttermost night, the life-exclamation. And the man heard it beneath him with a kind of awe, as his life sprang out into her. (134)

またコニーは「自分の中にもう一人の生きている自己」を感じ，「その自己」によって彼への礼賛といった感情を抱き，それは「女性というものの中心に，創造の眠りに深く沈んでゆくかにような」（１３５）との感覚を彼女にもたらすのであった。その夜クリフォードはコニーにラシーヌを朗読するが，そこでのコニーは「もの柔らかな静けさ」をたたえており，そうした自分と同じ世界にある男が彼女とともにあり，その男との子供が自らの血管の中にあることを感じてゆく（１３８）。この時の彼女はほぼ完全に「森」と同じ存在になり得たかのように描かれている。

She was gone in her own soft rapture, like a forest soughing with the dim, glad moan of spring, moving into bud. …She was like a forest, like the dark interlacing oakwood, humming inaudibly with myriad unfolding buds. Meanwhile the birds of desire were asleep in the vast interlaced intricacy of her body. (138)

このシーンについて鉄村春生氏は，「牢獄のなかで枯渇同然であった彼女が，『槲の森』として甦ったのだ。・・・・・・コニイはゲッケイジュに変身したダフネ神話の現代版である」（２５５－２５６）と論じている。このようなコニーに対して，かたやクリフォードの方は

What a strange creature, with the sharp, cold, inflexible will of some bird, no warmth, no warmth at all! One of these creatures of the afterwards, that have no soul, but an extra-alert will, cold will. (138)

というふうに「生命に満ちた姿とは逆行する人物」であって，「森」と同化し「生命」をその体内でもって感じ始めたコニーとは対照的に描かれている。

このようにみてくると，夫クリフォードとの不毛の生活また産業化が進む地域，時代の中で，「生命」の輝きや「生命ある人間としての存在」・「女性としての充足感」といったものを失いつつあったコニーであるが，「森」という場所は「生命」が息づき，物質文明が失ってしまった世界を留めており，森番メラーズは「森」が醸し出す世界をその体内に包摂した人物であり，彼の誘いによってコニーは女性として，人間としてかけがえのない「生命」を，「生命が画きだす世界」を取り戻してゆく様を読み取ることができよう。また鉄村春生氏は「ロレンス文学は，肉体に潜む暗い生命力がふとした自然な刺激で日常の意識を

突き破って顕在化するシーンを多く扱うが，そのときの衝動や行為を倫理観や心理の陰影で表すというより，生命の顕在化そのものを直視し，見極めようとする立場をとっている。人の深奥にある暗闇の神秘を探り当てようとすると，そうなるのであろう」（２２７）とみている。当作品でのコニーは，「森・樹木」と一体化する様相を呈しながら，こうした面をもまた体現しているといえようか。

Ⅲ

それではハーンについて，「森」や「樹木」は如何なる位置付けがされているのであろうか。

彼の来日後の第一作である *Glimpses of Unfamiliar Japan* の第一章“My First Day in the Orient”には，西洋では，梅や桜の開花にそれほどの意識を向けないのに，日本ではそれが美の奇跡といえるほどだとの樹木の美しさを称える言葉に続き，

> Is it that the trees have been so long domesticated and caressed by man in this land of the Gods, that they have acquired souls, and strive to show their gratitude, like women loved, by making themselves more beautiful for man's sake? Assuredly they have mastered men's hearts by their loveliness, like beautiful slaves. That is to say, Japanese hearts. (21)

との樹霊とでも言うべきものについての彼の意識を早くも垣間見せている。そしてそれが日本の心性ともなっていることに，喜びを感じているかのようでもある。

また同書の第十一章“Notes of Kitzuki”には，観音寺というところの墓地に，太い根が４本，ちょうど４つ足で歩くようなかっこうに，根上がりになって幹をささえている松の木があるのが紹介されている。そして，「とかく，こういう形の変わった木には，よく神が住んでいると考えられている」との記述がみえる（２５１－２５２）。

そして同書第十六章“In a Japanese Garden”では，

> That trees, at least Japanese trees, have souls, cannot seem an unnatural fancy to one who has seen the blossoming of the umenoki and the sakuranoki. This is a popular belief in Izumo and elsewhere. It is not in accord with Buddhist philosophy, and yet in a certain sense it strikes one as being much closer to cosmic truth than the old Western orthodox notion of trees as “things created for the use of man.” Furthermore, there exist several odd superstitions about particular trees, not unlike certain West Indian beliefs which have had a good

influence in checking the destruction of valuable timber. (358)

と樹木の霊魂を認める日本の考え方を実用的な西洋のそれよりも好ましいものとみている様が伺える。ハーンは続けて，「エノキ　ガ　バケル」という出雲の諺を引用しながら，「木のお化け」である物の怪が様々な姿を取り，木から遊離し歩きまわることを紹介している。そうしたなかで，「ギリシャ神話の木と森の精」を彷彿させるものとして，京都のとある侍屋敷の柳の木についての話が語られている。

それは，怪しいうわさのある柳の木が切られてしまうということを聞いた侍が，魂があるこの木を切るのは酷いことだと思い，自分の家に買い取り丹精したところ，その木の霊が恩に報いるべく，美しい女に姿を変え侍の妻となり，男子をもうける。しかしその後，侍の主命によりその柳は切られることになる。木の霊である女は，自らの命が断たれる覚悟を決め，子供の将来を慰めとして柳の中に姿を消す。柳は切り倒された後，三百人でも動かすことができなかったが，侍と柳の霊とのあいだに生まれた子が柳の枝をとって声をかけると，その木は子供のあとについていったという話である（３５８－３６１）。

このように，樹木に霊魂が存在することが日本においてみられることに，ハーンは興味と共感をもっていることが *Glimpses of Unfamiliar Japan* に散見されるのである。

次に *Kwaidan* をみることにする。ここにも今ふれた京都での侍と柳の霊に似た話が見受けられる。その“The Story of Aoyagi”は次のような話である。

能登の大名に仕える若侍友忠は旅の途中，柳の木陰にある家に宿を乞う。そこには貧しいが上品な老夫婦とその娘がいた。友忠はその美しい娘青柳に心惹かれる。そして困難な状況のなかでの不思議なめぐり合わせを経て，その娘と友忠は夫婦となる。しかし五年の後，彼の妻は突然苦しみ始め，自分が柳の霊であり，その拠り所である柳の木を誰かが切り倒そうとしていることを告げる。

> “I am dying! …And it were needless now, my dear husband, to hide the truth from you any longer: —I am not a human being. The soul of a tree is my soul; —the heart of a tree is my heart; —the sap of the willow is my life. And some one, at this cruel moment, is cutting down my tree; —that is why I must die! …” (135)

そして青柳の身体は奇妙に崩れて床まで沈んでしまい，後には着物と髪飾りだけが残されていた。妻の死後，友忠は僧となり各地を行脚するうち青柳と出会った場所に行き着くが，そこにかつてあった家はなく，三本の柳の切り株，二本は老樹で一本は若木のそれがあるのみであった。友忠はその場で，青柳とその父母のために手厚く仏事を営んだ。

「青柳の話」が先の「京都における侍と柳の話」と類似していることは，興味深いものを

感じさせるが，*Glimpses of Unfamiliar Japan* においてハーンは「日本では，エノキと柳が特に化ける木と思われている」（３５８－３５９）ことを述べ，それは，先の引用箇所から読めるように「西インド諸島のある信仰が，貴重な木材の根絶を阻止するのに有効であったのと相似て，ある特殊な樹木についての迷信が存在することによるのだ」（３５８）としている。

また上の引用部分には“the sap of the willow”という表現がみられるが，ロレンスも本稿で引用した *Lady Chatterley's Lover* (121-122) において，コニーが「森」の樹木がもつ上昇的な生命力を自らの体内に感じてゆく場面で“the sap in the massive trees”という表現を用いている。‘sap’には「樹液」のほかに「生気，活力」の意があり，こうした表現が見出されることは，ハーンのみならずロレンスにも「樹霊についての意識」が認められるとする観点にひとつの材料を提供するものといえよう。

さらに *Kwaidan* には，“Jiu-roku-zakura”という話もみられる。これは，幼い頃より家族らと共に接してきた思い出深い桜の老木を深く愛した老侍が，その木が枯れたのを悲しみ，その甦りを祈念して，自らが枯れ木の身代わりとして死すべく，桜の木の前で武家の作法にのっとり切腹したところ，桜は切腹の行われた正月十六日にのみ花を咲かせるというものである。

ここでは次の箇所に注目してみたい。

> But the *Jiu-roku-zakura* blossoms with a life that is not —or, at least, was not originally —its own. There is the ghost of a man in that tree. (139-140)

即ち，ここでは桜は切腹した侍の魂を宿したのであり，人の生命・霊と樹木が一体化した姿が描かれている。これは最初にみた“Ubazakura”と相通ずるものを感じさせるものとなっている。

ここで取り上げた“The Story of Aoyagi”と“Jiu-roku-zakura”は，平川祐弘氏による論稿「御神木が倒れた日」において，ハーンの樹齢信仰を示すものであるとの指摘がなされている。同論稿における指摘を要約しながら抽出するならば，「西洋にも老樹を尊ぶ感情は存在するが，一神教であるキリスト教の教化が進み，ゴッド以外の神を崇めることを禁じてからは，老樹を崇める風習は，少なくとも表面的にはすたれてしまった」（４７３）こと，「キリスト教は人間以外の動物には霊魂というものを認めない，植物についてはいっそうそうである」（４７３）こと，「しかし，西洋にも古代においては樹霊信仰がケルトの世界にみられ，そうした神木はキリスト教以前のドルイド教の崇拝対象ともなっていたが，キリスト教はこれらをも排除した」（４７４－４７５）こと，「そうした歴史を有しながらも，アイルランドの詩人イェイツ（William Butler Yeats）の『煉獄』などには，樹霊といったものが感じられ，今日でもアイルランドその他辺境にはひそかに樹木を信仰してい

る様子がうかがえる」（４７５）こと，樹木・樹霊への信仰が，今日でもこのように認められることの一因として，「ヨーロッパでも近ごろではギリシャ思想の影響などというものは表層的なものに過ぎず，ヨーロッパ文化の根源の層はケルト的なものであることがしきりに説かれている」（４７７）という状況等が提示されているのが読み取れる。ここにみられる「樹霊信仰を含むアニミズム性を有するケルト人とドルイド教，それらを排斥しようとするキリスト教」というあたりは，鉄村春生氏によっても示されている（４７－５４）。

こうした論証から，西洋世界においても樹霊信仰は存在していたのであり，現在もその流れは根強く息づいているのであって，しかもそれは，アイルランド等のケルト世界やそうした地域の古代宗教であったドルイド教との繋がりが強いものであることがわかる。そして，イェイツの名前も挙げられているが，彼とハーンについては，*A Fantastic Journey* の Introduction において，やはり平川祐弘氏により「ハーンとイェイツを同じ視野の中に並べてみることは納得のいくことではあるまいか」（Murray 12）と示唆されている。また同氏は『ラフカディオ・ハーン　植民地化・キリスト教化・文明開化』においても，「・・・・・・ハーンは，超自然的なるものに対し強い畏敬の念を抱き続け，霊的なことに終生関心を寄せていた。そうした意味においては，キリスト教信仰を失ったイェイツが宗教的であるというのと同じ意味で，ハーンは実は深く宗教的な人だったのである。イェイツとハーンが謡曲や怪談など日本人の霊魂の世界に惹かれたことには，アイルランド育ちの人として共通の文化的・宗教的的背景があったのである」（１８０）と述べている。このようにハーンとイェイツはそのアイルランド的背景においての繋がりがしばしば取り上げられてきた作家である。従って，このような点に鑑みれば，ハーンが日本での樹霊といったものに関心と共感を抱いた背後には，彼が幼年から青少年期を過ごしたアイルランド即ちケルト的世界の影響があるとみてよいと思われる。

またハーンには上記の作品に加え，*Kokoro* の “The Nun of the Temple of Amida” には「物語を秘めた花」（７３），「木の精を宿した樹木」（７３）といった描写がみられることも付記しておきたい。

Ⅳ

本稿においては，ハーンとロレンスにおける「森・樹木」という観点から比較，検討を試みることを目的とするが，両者とも「森・樹木」についての意識・傾倒の程はかなり強いものがうかがわれた。ハーンは怪談話等として語りながら，そのなかに樹霊への関心を示しており，それはケルト世界との繋がりを感じさせるものを含んでいた。ロレンスは産業化，物質文明への反発・嫌悪を示しながら，アニミズム性と樹木変身願望を内包させていた。

従って両者はかなり似た面を有しながら「樹木の世界」を志向しているといえようか。

ハーンの樹霊への意識は，アニミズムを想起させるものといってよいであろうし，“Ubazakura”や“Jiu-roku-zakura”はロレンスの樹木変身願望との重畳性を有するものとみなしてよいのではなかろうか。またロレンスは，産業化，物質文明の虚無感のなかで枯渇同然であったコニーを「森」として甦らせているが，ハーンの“Ubazakura”や“Jiu-roku-zakura”もある種の甦りが感じられよう。この二つの話においては，死んだ人間がその霊魂を桜に宿らせて甦り，人の寿命をはるかに越えた年月生き続ける様がうかがえることが共通している。そして“Ubazakura”では，「お露」の乳母であるお袖が，身代わりとなって死んだ後，不動様の庭に植えられた桜にその霊魂を宿して甦ったかの観を呈するが，その桜に咲く花は“…its flowers, pink and white, were like the nipples of a woman's breasts, bedewed with milk.”という様子であったとされている。そこには‘dew’即ち「露」が意識的に使われていると思われる。英語の「露（dew)」には，新鮮さ等のイメージとともに「復活」のそれも込められているからである。従って当作品では，「露（dew)」を媒介として用いながらの霊魂の甦りという面も着目されてよいかと思う。

ハーンとロレンスの「森・樹木」への意識の背景という点から，さらに両者の接点を見出すことはできないであろうか。本稿で既に参照した井上義夫著『ロレンス　存在の闇』では，*Lady Chatterley's Lover* がロレンスによって３度改稿されており，クリフォードが「原始の古き森の神秘を感じる場面」についても，第二草稿と比べるならば，「幻」や「幽霊」の語は消え，「ドルイド僧」は「修道僧」に置き換えられたと指摘されている（１７２）。そして，森の神秘性を希薄化させる過程が，森に住む猟番を神秘化する過程に対応しているとみている（１７３）。ここには森の神秘が弱められたとあるが，同書には「・・・・・・第二草稿は，作品の完成度は最終稿に劣るとはいえ，執筆当時の作者の心理を比較的忠実に映し出している」（１６９）との指摘もみることができる。そこで第二草稿において「ドルイド僧」を登場させたロレンスの心理ないし意図を推測してみることにしたい。

ドルイドについて，井村君江氏の「ケルト神話の宇宙観—ドルイド僧を中心として」によると，諸民族アイルランド入島物語である『侵略の書』には，「神々や英雄，妖精らに，魔術をかけて，力を貸したり滅ぼしたり，彼らの運命を魔法の杖で変える力のある者たちが存在したが，それがドルイド（Druid）たちである」（２９）とされている。また，「輪廻転生」「霊魂不滅」といった考えがドルイディズムの中心であるとされる（５０－５１）。そして，

> ドルイド教は，本来啓示による宗教ではなく，自然宗教であり，宗教と哲学が渾然一体となっているものである。従って太陽と大地の古い神々を信じ，生き物の中に霊的なものを知覚し，自然と，宇宙と，自己の理解と一体化を試みている。また命は生と死，更新と再生の周期を繰り返すことも信じている。（５８－５９）

との説明がなされている。

このようなドルイド教が示すところのものは，ロレンスの世界や特質と重なり合ってくるように思われる。「生き物の中に霊的なものを知覚」する点はアニミズムに繋がるであろうし，「自然と，宇宙と，自己の一体化」という点からは，*Lady Chatterley's Lover* でのコニーが森と一体化してゆく様子に，そしてそのことによりコニーが生気を取り戻し，甦ってゆく様は「更新と再生」という要素と照応するように感じられる。そうであるならば，ロレンスはドルイド教的な思想を内在させているとする見方もできるのではなかろうか。ドルイド教はキリスト教以前の古代宗教であり，それへの意識はロレンスの「太古への回帰」という面を示すもののひとつといえよう。*Lady Chatterley's Lover* には，

> "...The human body is only just coming to real life. With the Greeks it gave a lovely flicker, then Plato and Aristotle killed it, and Jesus finished it off. But now the body is coming really to life, is really rising from the tomb. And it will be lovely, lovely life in the lovely universe, the life of the human body. " (234-235)

とのコニーの言葉がみられるが，北沢滋久著『D.H.ロレンス　生と死のファンタジー　―人と文明の再生を求めて―』の「序」では，上記引用部分に触れながら，「『人間の肉体に宿る生』を真実甦らせるためには，プラトン，ソクラテス以前のギリシャに回帰しなければならないのだとロレンスは思い描いているようだ」（ｘⅲ　筆者要約）とされている。こうしたことに加え，*Lady Chatterley's lover* の第二草稿でやはり用いられたという「幻」や「幽霊」などの表現をも考え合わせれば，キリスト教や理性的思惟が登場する以前の「豊かで神秘の想像力をもって鳴るケルト人」（鉄村　５０）の世界を感じさせるものとなり，ハーンとの親近性はいっそう強まるかのように思われる。また *Lady Chatterley's Lover* において，クリフォードが「古き原始の森の神秘を感じる場面」での森は「オークの森」（４２）となっているし，「コニーが森とほぼ同じ存在になり得た場面」でも「オークの森」（１３８）となっている。これについても，ケルト人の樹木崇拝という点から

> ・・・・・・ドルイド教とオークの木の関連を避けて通るわけにはいかない。ドルイド教は，キリスト教伝来以前のブリテン島やアイルランドにいた古代ケルト人の間で信仰されていた宗教として知られており，彼らは神への祈りを捧げる場所をオークの木立と決めていた。「オークの木を知っている者」というドルイドの原義は，信仰が木，なかんずく生命力があって大樹となるオークの木と密接な関係にあることを詳らかにしている。（鉄村　５１）

との指摘もなされており，「オークの森」という設定により，当場面がドルイド教やケルト世界を彷彿させる箇所となってくるとみることもできよう。

このようにみてくると，ハーンとロレンスの「森・樹木への意識・傾倒」の背後には，両者ともにケルト的世界を内包させているという面が見出されることになりはしないだろうか。これに関して想起されるべきは，平川祐弘氏によりなされていた「ローロッパでも近ごろはギリシャ思想の影響などというものは表層的なものにしか過ぎず，ヨーロッパ文化の根源の層はケルト的なものであることがしきりに説かれている」という指摘であろう。

栩木伸明氏による「W.B.イェイツとたそがれのケルト」では，イェイツがアイルランドやケルトをいかにとらえようとしていたかが考察されており，それによるとイェイツは

> ・・・・・・「文学はつねに古代の情熱や信念にみなぎっていなければ，たんなる事実の記録，または情熱の伴わない空想，情熱の伴わない瞑想になりさがるであろう」と主張し，「ヨーロッパにおいて古代の情熱や信念を生み出した源泉といえば，スラヴ系，フィンランド系，スカンジナヴィア系，ケルト系があげられるが，それらのなかで数世紀にわたりヨーロッパ文学の本流の真近にあった源泉はケルト系のものだけである」・・・・・・（１２１）

と断言するとされている。そして同論稿においては「・・・・・・ケルトはつねに発見され，更新されてゆく『生きている伝統』である」（１２４）と論じられている。

こうした示唆等も鑑みながら，ハーンとロレンスにおける価値とは何かに目を向けるならば，両者の作品・世界のなかにみられるこうしたヨーロッパ文化の根源とされる古代ケルト的世界を喚起させるという点にもそれはあるのではなかろうか。

Works Cited

Hearn, Lafcadio. “In a Japanese Garden.” *Glimpses of Unfamiliar Japan*. Tokyo: Charles E. Tuttle Publishing Co., Inc., 1996.

———. “My First Day in the Ancient.” *Ibid.*

———. “Notes of Kizuki.” *Ibid.*

———. “The Nun of the Temple of Amida.” *Kokoro.* Tokyo Charles E. Tuttle Publishing Co., Inc., 1996.

———. “Jiu-roku-zakura” *Kwaidan* Tokyo: Charles E. Tuttle Publishing Co., Inc., 1995.

———. “The Story of Aoyagi.” *Ibid.*

———. “Ubazakura.” *Ibid.*

———. “The Dream of a Summer Day” *Out of the East* Tokyo: Charles E. Tuttle Publishing Co., Inc., 1996.

Lawrence, David Herbert. *Lady Chatterley's Lover*. London: Penguin, 2000.

———. “The Spirit of Place.” *Studies in Classic American Literature*. New York: Penguin, 1977.

Murray, Paul. Introduction. *A Fantastic Journey.* By Sukehiro Hirakawa. Sandgate; Japan Literary, 1993.

糸多郁子「『チャタレイ卿夫人の恋人』における大衆社会と階級」　荒木正純　倉持三郎　立石弘道編『D.H. ロレンスと新理論』　株式会社国書刊行会，１９９９。

井上義夫『地霊の旅　評伝 D.H.ロレンスⅢ』　小沢書店，１９９４。

———.『ロレンス　存在の闇』　小沢書店，１９９４。

井村君江「ケルト神話の宇宙観　—ドルイド僧を中心として」　鎌田東二　鶴岡真弓　編著『ケルトと日本』　角川書店，２０００。

北沢滋久『D.H. ロレンス　生と死のファンタジー　－人と文明の再生を求めて』　金星堂，１９９９。

厨川白村『エッセイと文明批評』　厨川白村集刊行会，１９２５。

田部井世津子「『チャタレイ卿夫人の恋人』における「大地的創造力」」D.H.ロレンス会編集　代表者吉村宏一『ロレンス研究－『チャタレイ卿夫人の恋人』』　株式会社朝日出版社，１９９８。

鉄村春生『異端の森　—樹木から拓く英文学—』　成美堂，２００４。

栩木伸明「W.B.イェイツとたそがれのケルト」　鎌田東二　鶴岡真弓　編著『ケルトと日本』　角川書店，２０００。

平川祐弘「御神木が倒れた日」『文藝春秋　特別号』　文藝春秋社，１９８８。

———.『ラフカディオ・ハーン　植民地化・キリスト教化・文明開化』　ミネルヴァ書房，２００４。

フランシス・キング「記念講演　ラフカディオ・ハーン　—帰属と距離」『へるん　[別冊／１９９０] 来日百年記念報告集』桝井幹生訳，八雲会，１９９４。

丸山学『小泉八雲新考』　講談社，１９９６。